

22、 信楽開発

南無阿弥陀仏とは、縦に三世を貫き横に十方に遍する宇宙の真理を諦得された人格者を信奉して頂くことである。念仏とは今の心は人に非ずと言う事で、み仏様に信順無疑する時は法龍の相の儘で、体徳から言えば阿弥陀仏と一体であり、機相から言えば有漏の凡夫である。何と有難い事か。空間的無辺だから何処でも救うと言う事であり、時間的無限だから何時でも救うと言う覚体だから、それなら何処でも何時でも救うのなら今救うて下さい、今此処でと言う事が平生業成とは 底の知れない有難さではない

か。その光明無量寿命無量の念力が私に届けば、信樂の二文字となり、開けば信心歡喜となり、曇鸞大師は破闇滿願と教え、道綽禪師は罪惡觀と無常觀で説き、善導大師は信機信法で示していらるるのだ。この仏智滿入の一刹那を宗祖大師は「信の一念と言ふは、信樂開發の時尅の極促を躰し、廣大難思の慶心を彰はす」と教えられてあるのだが、千載の闇室に光明無量の光が届けば室内が明るくなり、寿命無量の仏徳によって感謝法悦となるのである。

道俗よ!! 信の一念こそ浄土真宗の極意であり、唯信独達の法門の根幹をなすもの、八万の法蔵を読破する一刹那、この難関を突破するから極難信と言うのだ。この関所を超越ささるる事は不思議の中の不思議だ。この深妙の境地を諦得すれば十方法界の功德を全領するのだ。進めく一歩も退いてはならないぞ。

然るに我機を眺むれば、心中閉塞のその中、勝他我慢に無智我見、放逸無慚に嫉視反目、蛇蝎奸詐に強欲非道、煩惱具足で欠けた物が無い。その悪を悪と知らないで素直に信じていると名利に人師を好んでいる心が照らし出される迄には、どれだけの御手間

が掛かかつた事ことか知しれない。調ちようじゆく 熟こうみようの光こう明みやうのお育そだてにより悪あくを悪あくと知しらされた時とき、地じ獄ごく一定じようを知しらされた時とき、往おう生じようの望のぞみが絶たえた時とき、不ふ可かしぎ思議ぎの願がん力りきとして仏ぶつの方かたより往おう生じようを治じじよう定ていせしめられた時とき、必ひつ墮た無む間けんが極ごく楽らく一定じように飛とび上あがつた時とき、心こころも言こと葉ばも絶たえた味あじ、あつともすつとも言いえぬ味あじ、十じゆ方ほう法ほう界かい我わ物ぶつなり、光こう明みやう輝かがく広ひろい天てん地ち、六しゆ種しゆに震しん動どうすると言いつてよいか、虚こくう空くうより妙みよう華けが降ふると言いつてよいか、想そう像ざうもつかぬが、形けい容ようも出で来きない。盲もう者じゃが開かい眼げんの一せつ刹な、無む明みやうの闇やみが晴はれ亘わたつた信しん樂ぎやう開かい発はつの一いち念ねんは、不ふ可かし稱じよう不か説せつ不ふ可かし思議ぎで言こと葉ばに掛かけられないと言いえば「言いわづ講こう」と貶けなすかも知しれないが、有あり難がたいとか、勿もつ体たいないとか、嬉うれしいとか、並ならべて見みた処ところで九ぎゆう牛うの一もう毛ひも表ひよう現げん出で来きてはいないのだ。その次つぎの刹せつ那なの喜よめびを広こう大だい難なん思しの慶きよう心しんと仰おほせられたのだが、本ほん当とうに広ひろいぞ大おほきいぞ。想そう像ざうのつかない慶よろこびであつて、此この人じん生せいの、結けつ婚こんしたとか、宝たからくじが当あたつたとか、家いえが建たつたとか当とう選せんしたとか、人にん間げんの世せ界かいの喜よめびと比ひ較かくになるものは微み塵じんもない。南な無む阿あ弥み陀だ仏ぶつく。間まに合あわなぬ奴やつが本ほん願がんの間まに合あうたとは不ふ思し議ぎの中なかの不ふ思し議ぎではないか。無む量りやう永よう劫こくの迷まよいの打うち留どめとは仕し合あわせではないかと躍おどり上あがらずにはいられなんだ。この一いち念ねん

が相そう続ぞくするのを 善ぜん導どう大だい師しは礼らい讃さんに 「上かみの如ごとく念ねん々ねん相そう続ぞくする者ものは十すなわち十うま生うまれ、百ひゃくは即すなわち百うま生うまる、何なにを以もつての故ゆえに、外げの雜ぞう縁えんなくして正しょう念ねんを獲えたるが故ゆえに」と腹はらの据すわりが決きまるのだ。如にょ実じつの信しんには如にょ実じつの称しょう名みょうが嘖ふき出でるのだ。如にょ実じつの称しょう名みょうたる報ほう謝しゃの称しょう名みょうには献けん身しん的てきの報ほう恩おんの行ぎょうは相そう続ぞくするのだ。それそれが俗ぞく諦たいの行ぎょう儀ぎとなつて頭あらわわれてくるのだ。